

学習スタイルの変化から見た大学図書館におけるコモンスペースの在り方に関する研究 ラーニング・コモنزのファシリティマネジメント研究

正会員 ○原 郭二*
同 加藤 彰一**

大学図書館 コモンスペース PBL
ラーニング・コモنز FM 電子ジャーナル

Abstract

University Libraries face great environmental changes, and new learning facilities, namely "learning commons," are considered to be one of facility counter measures. This study deals with features of common space by focusing on PBL, problem based learning.

1. 研究の背景と目的

国立大学のとりまく環境が大きく変化している。大学環境では、大学の法人化、18歳人口の減少、第三者評価による競争原理政策の導入、大学図書館の環境においては、情報化社会における学習形態の変化、学生が求める能力の変化、大学の教育システムの変化、電子ジャーナルの普及など、大学図書館が求められる機能は多様化してきているといえる。そして、大学図書館に求められる機能と実際に提供される機能の間には格差が生じてきている。さらに、大学図書館は学生のキャンパス内の学習空間・居場所としても重要な施設としての議論もあり、今後、従来の図書館機能に加えて充実した場所の提案も必要になってきている。

これらから本研究では、学生や大学から求められる機能と、実際の計画との隔たりをなくし、新しい学習空間や居場所を提案することで今後の良好な学習環境についての可能性を探り、今後役に立つことを目的とする。

2. 研究方法

研究方法は文献などを用いて大学図書館の利用者の変化、電子ジャーナルやデータベースサービスの導入状況、大学図書館の取り巻く現状について調査し、把握する。その後、大学図書館の学術情報基盤としての機能や建築的空間の意義を整理する。そして、すでに大学図書館の情報化に対応してきている米国における展開について把握する。以上の現状から考察し、今後の建築的視点において、日本の大学図書館の在り方について知見を得る。

3. 大学図書館の基本的役割と状況変化

大学図書館は、大学本来の目的である高等教育と学術研究活動を支える重要な学術情報基盤であり、大学において行われる教育、研究に関わる学術情報の収集、蓄積、組織化が行われ、蓄積された学術情報は、公開されることにより社会の共有財産となる。これらの学術情報の活用によって、大学はより一層の教育研究活動を促進する。この知のサイクルにより、大学の教育研究活動を一層活性化するという役割がある。

4-1. 電子化の普及状況

電子ジャーナルの普及、所蔵資料のデジタル化等、学術情報流通における電子化については、この15年程度の間に急速に進展しつつある。国立大学図書館協会の大学における電子ジャーナルの利用の現状についての調査によれば、大学図書館における電子ジャーナルの総購読タイトル数は57、平成15年度においては全大学で延べ85万タイトル、国立大学では1大学当たり約4,900タイトル、最多で14,000タイトルに達している大学もある。

4-2. 大学教育システムの変化

大学の法人化や第三者評価による競争原理政策の導入などにより、大学は自学の教育システムの特色化・個性化に努めており、それに伴う教育施設の充実が課題となっている。そして、大学によっては講義型の授業だけではなくPBL(Problem-Based Learning)等の学生が自主的に学習、体験する学習の形式が広がりつつあり、これらに必要なハードとソフトの充実も課題となっている。PBLは問題解決能力の向上として①自主的に学習し続ける資質の向上。②技量と知識を個人から全体に還元するコミュニケーション能力の向上。③人間として円熟するために自己反省能力の獲得。などの能力を獲得できる教育方法として医学部を中心に世界中で行われ始めている。

4-3. 学生の学習認識の変化

社会全般においても働く上で求められる能力も変化してきており、それに伴い学生が求める身につけたい能力にも変化が表れてきている。プレゼンテーション能力、理論的能力、コミュニケーション能力など講義や自主学習以外で体験・学習する能力が求められてきている。

5. 大学図書館の新たな展開

5-1. インフォメーション/ラーニング・コモنز

インフォメーション・コモنز(以下IC)はこれまでの図書館や情報センターとは異なり、①電子資料②コンピュータ資源と情報ネットワーク③広い机・作業場所などの使い勝手のよい環境を整備したものである。図書館、学習・研究室といった機能を統合し、学生の学習・研究活動を向上させることを目的に提唱されたモデルである。

ラーニング・コモنز(以下LC)は、ICをさらに展開して、学生の主体的な学習活動を重視し、学生が自主的に問題解決を行い、自分の知見を加えて発信するという学習活動全般を支援するための施設とサービス・資料

Analysis on the Common Space in University Libraries Focusing on Changes of Learning Style. HARA Koji, KATO Akikazu
Facility Management Studies on Learning Commons.

を提供するモデルである。これらの呼称は大学の整備目的、図書館環境などにより様々であり、次項の5-2に示す事例に加え、リサーチ・commons(UCLA)と呼ばれている事例もある。

5-2. 事例概要

(1) エモリー大学コックスホール

エモリー大学は1836年に設立され、全米有数の医学大学院、経営大学院を有し、質の高い研究に力を入れつつ、学部教育にも非常に力を入れており、研究・教育の両方において質を重視している大学である。コックスホールの構成要素は、Space(施設・設備)、Stock(資料)、Staff(職員)となっている施設・設備としてはまず、通常の閲覧席よりも広いテーブルや作業場所、コンピュータ資源とネットワーク環境、必要な資料群などがある(図1)。カフェやラウンジなどの社交的な施設。そして、グループ学習室やプレゼンテーション室(図2)。移動可能なパーティション等によるフレキシブルな空間などが付設されていることもある。資料としては、従来図書館で所蔵していた印刷資料のほか、電子ジャーナル・電子ブック、電子辞書・データベースなどの電子資料を利用可能とする。また、これらの施設・設備と資料を十分に活用するための人的な支援サービスは不可欠となっている。



図1 ワークス・ステーション



図2 プレゼンテーション室

(2) マサチューセッツ大学アマースト校デュボア図書館



図3 スタディポッド

スタディポッドと呼ばれる1台のPCに1~3席、6席のテーブルを一組とし、用途に応じて使い分が可能(図3)。また、技術支援デスク、レファレンス・研究支援デスクなどのサービス

をしているだけでなく、学内の他組織との連携による学習などの指導・アドバイスをを行うコーナーなどを設置し、多岐にわたる学生の学習支援活動を行っている。

5-3. 分析と考察

IC/LCの主な特徴は次のようなものが考えられる。

- (1) 学生の学習に必要な情報資源や情報技術関連設備と活用能力を育成するためのサポートの統合的な提供。
- (2) 図書館職員によるレファレンスサービス、教員による情報リテラシー教育等による情報技術活用支援、学生の学習相談等のサービスを集約化。
- (3) 大学図書館が学部・研究科、情報連携基盤センターや

情報メディア教育センター等学内の教育・情報施設との連携・協力を強化し、大学の教育課程への関与。

(4) グループ・プレゼンテーション、授業、PBL等様々な学習形態に対応したスペースと必要な設備、ツール、情報資源の統合的な提供。

(5) 学術機関リポジトリなどのデジタル・コンテンツと印刷体の図書館資料をシームレスに活用できる能力を効果的に育成する場の提供。

PBLを取り入れた教育現場では学生同士の討論を行うことのできる設備、必要な資料や文献、また学習がより良くなるようなアドバイスなどを効率的に入手できることは非常に有益になってくる。これらから、大学図書館にLCを設置することで解決しようとする事例は増えてきていると考えられる。

6. 学習環境に配慮すべき要素

①目的行為：行為者の人数、属性・行為の種類等により、座席間の距離、広さや形状、レイアウト、サービスは配慮すべき要素であり、計画時には重要になってくる。

②諸空間：大学図書館には自学自習から生産活動と行動の違いにより作業スペースの違いがあり、均等配列の閲覧室だけでなく柔軟な教育環境を提供するためには、フレキシブルなレイアウトに対応した机やパーティションなどを用いた空間は有効であると考えられる。

③空間のゾーニング：PBL等を行う上で、他行為者との関係をコントロールする空間構成、分節化は不可欠である。諸室の設置や書架の配列などは熟慮が必要である。

④教育システム：PBLを取り入れた授業等、用途目的と教育システムに適応したサービスには多様な機能と柔軟性に長けた施設提供が必要になってくる。

7. まとめ

大学図書館の在り方については各大学の附属図書館が実例を踏まえ議論を講じているのが現状である。事例で行われていた対応は、PBLへの応用の可能性を実践した一つのモデルであると考えられる。このような環境を提供することは教育環境を整えるだけではなく、PBLを行っていく中で研究も発展していくという展望もある。

現在は、多様化した機能を配置するためにスペースを分断することによって可能にしているが、平面計画やゾーニング手法としてはより最適な方法がありそうである。今後は、建築学的な視点では図書館空間のもつ社会的・相互作用的性格を、最大化してゆくための施設・設備を整備していくことが必要になってくると考えられる。

[参考文献]

- 1) 原郭二・加藤彰一・木下誠一:「大学図書館におけるコモンスペースのプレースメイキングに関する研究—電子ジャーナル化に伴うコモンスペースの利用変化に関する考察—」, 2008年度日本建築学会東海支部研究報告集、第四十六号
- 2) 三重大学HDEC HP <http://www.hedc.mie-u.ac.jp/index.html>
- 3) Emory University <http://www.emory.edu/>
- 4) University of California <http://www.ucla.edu/>
- 5) University of Massachusetts Amherst <http://www.umass.edu/>

*三重大学大学院工学研究科 博士前期課程

**三重大学大学院工学研究科 教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Eng., Mie Univ.
Prof., Graduate School of Eng., Mie Univ., Dr.Eng.